

海外STUDY

高齢社会と向き合う 英国マンチェスター

—エイジフレンドリーな都市を目指して

吉本光宏(ニッセイ基礎研究所 研究理事) 協力：ブリティッシュ・カウンシル、マンチェスター大学ウィットワース美術館

世界のどの国も経験したことのない超高齢社会に突入した日本。2015年の高齢化率は26・7%で今後も上昇を続け、2060年には39・9%、2・5人に1人が65歳以上、75歳以上の割合も26・9%と4人に1人となる*1。

高齢化の進展は日本に限ったことではない。現在の高齢化率が20%前後の欧米諸国も60年には25%前後(フランス、英国など)、高いところでは35%前後となる国々(ドイツ、イタリアなど)もある。アジア諸国でも、今は高齢化率が10%前後の中国、韓国、シンガポール、タイなどは今後高齢化が急速に進み、60年には35%前後になると推測されている。現在の高齢化率が低い分、今後20~30年間の高齢化のスピードは日本よりも急激である*1。

高齢社会への対応は、日本ばかりか世界各国に共通するきわめて大きな課題となっている。

そうした中、世界保健機関(WHO)は2010年にエイジフレンドリー(高齢者にやさしい)な都市・地域の世界的ネットワーク(Global Network for Age-friendly Cities and Communities)を立ち上げた。英国で最初に参加したのがマンチェスター市だ。同市はエイジフレンドリー・マンチェスターというスローガンを掲げ、市の関係部局だけでなく、住宅やまちづくりの関係団体、大学や文化施設などと連携して、高齢者が安心して歳を取り、楽しく生き生きと暮らせる都市づくりを推進している。

今回の海外スタディでは、マンチェスター市における高齢者政策の全体像と、特徴的な文化事業を取り上げた。

WHOのエイジフレンドリー・シティ



WHOがエイジフレンドリー・シティ(AFC)のネットワークを立ち上げた2010年の参加は、マンチェスターを含めわずか10都市程度だった。しかし現在では、37カ国、380の都市や地域が参加するまでになっている。その人口は1億3400万人。日本では12年に秋田市が、15年に宝塚市がそれぞれ参加した。

AFCは高齢社会への取り組みを評価することが目的ではなく、ネットワークに参加することで、各市がより高齢者にやさしい都市づくりへの実践を進め、各都市の経験や実績、課題などを共有するのが狙いである。

ネットワークに参加するには、次の8つのテーマ領域で自都市の現状を評価し、それを改善するための3年間のアクションプランを策定、実施する。そしてどんな進展があったかをモニタリングして、WHOに報告することになっている。

- 1 屋外スペースと建物
- 2 交通機関
- 3 住居
- 4 社会参加
- 5 尊厳と社会的包摂

図表1 WHOのエイジフレンドリー・シティの8つのテーマ領域



出典：WHO (2007), Global Age-friendly Cities: A Guide

- 6 市民参加と雇用
 - 7 コミュニケーションと情報
 - 8 地域社会の支援と保健サービス
- ただし、それぞれの都市の状況を踏まえた計画が前提で、WHOから何か基準を押しつけたりするようなことはない。

マンチェスター市の高齢者政策の歩み



マンチェスター市は、WHOのAFCネットワークに参加するかなり前から高齢者政策を推進していた。1990年代の半ば頃から「高齢問題の作業部会」による検討などを含め、高齢者が直面する本當の課題は何かを把握し、それに対応するさまざまな施策を行ってきた。

●高齢者に価値を(VOP)

*1 内閣府「平成28年版『高齢社会白書』」

それが本格化したのは、2003年に「高齢者に価値を (Valuing Older People, VOP)」という政策を立ち上げた時だった。翌年に高齢者によるVOP理事会を設置し、戦略計画を発表した。

それに基づいて、05年以降、老人差別の解消など、一般の人々だけではなく、高齢者自身そして政策立案者たち的高齢者に対するイメージを前向きなものに刷新する大がかりなキャンペーンが行われた。

同じ頃、市内の高齢者の集まりである高齢者フォーラム (Older Peoples' Forum) が組織された。50歳以上の市民なら誰でも登録可能で、年1回、市役所で会合が開かれ、高齢者自身が疑問や心配事を相談し、政策担当者に直接提案を行える機会となつていく。現在の登録者数は約1200人。登録書類には、交通、健康・介護、住宅、生涯学習、LGBT、文化、安全など関心のある分野を記入するようになっており、自身で高齢化問題に取り組もうという積極的な高齢者の集まりにもなっている。

VOPの6年間の成果に基づき、09年には次の10年間の政策や戦略などをまとめた「歳を取るのに素晴らしい場所マンチェスター (MANCHESTER: A GREAT PLACE TO GROW OLDER 2010-2020)」が策定された。

そこに示された20年までの目標は次の5つである。

・高齢者にとってより良い地域づくり (住宅、交通、環境、安全)

・高齢者の収入と雇用の増大

・高齢者の文化・学習活動への参加の促進

・高齢者の健康増進

・高齢者向けのケアや介護の充実

さらに、平等の促進、関係の改善、参加の促進という3つの分野横断的なテーマが設定され、先の5つの分野ごとに、具体的な目標や施策、事業案が示された。

文化に関しては、07年にVOPカルチャー・オフア (文化の提供) がスタート。09年に高齢者向けの文化プログラムが本格化して、マンチェスター市の高齢者政策を特徴づける重要な事業となつていった。

● AFC ネットワークへの参加

2010年、市はWHOのAFCネットワークに参加。以来、マンチェスター市の高齢者政策は、VOPに代わつてエイジフレンドリー・マンチェスター (AFM) と呼ばれるようになり、それまでの取り組みや成果を継承しつつ、WHOのAFCモデルを活用して施策の強化が図られた。以降、市では高齢者の生活の質を向上させ、社会的な阻害要因を軽減するため、AFCの目的に合致するプログラムを推進してきた。

現在、AFMおよび後述するGMエイジング・ハブの戦略責任者を務めるポール・マ加里さんは、WHOのAFCネットワークに参加した利点として、市役所内部の高齢者政策に対する理解が進んだこと、国内外の都市との連携が容易になったことを挙げる。もうひとつ重要なのは、AFCに参加

しなければ、それまでの政策に満足してあぐらをかいてしまつていただろう、ということだ。高齢者に価値を (VOP) というスローガンも、その中で展開される事業も、ある程度は評価できるものだったからである。

しかし、高齢者に価値をという言葉には、どこか温情主義的なニュアンスがあり、「どうやって高齢者に価値を与えるのか」と問われてもうまく説明できなかった。09年の政策文書に含まれていた「生涯暮らせる地域づくり (Lifetime Neighborhood)」は、英国政府が推進した政策に基づいたものだが、必ずしも適切なものではなかった。自分たちの活動をより明確に伝えられるブランドのようなものを探していた時に、WHOのAFCに出合ったのである。エイジフレンドリーという言葉によって、マン

チェスター市の高齢者政策がどのようなものかと説明しやすくなり、政策の目標もクリアになった。エイジフレンドリーな公園、エイジフレンドリーな建物、エイジフレンドリーな商店やサービスといった表現によって、市民や高齢者の理解を得られるだけでなく、事業パートナーや関係者も市の高齢者政策の方向性や重要性、具体的なイメージを理解でき、賛同や協力の輪が広がっていった。

マンチェスター市の人口は約53万人だが、実は高齢化率は9.4%と低く、英国全体の17.8%を遥かに下回っている (15年)。マンチェスター大学に通う約4万人

の学生など、若者が多いことが原因だが、そのことは皮肉にも高齢者政策を進める上の課題となつている。高齢者問題が身近に感じられないからだ。しかし、今後高齢化が進むことは確実で、そのためにも、高齢者政策のわかりやすい言葉が必要だった。

● マンチェスター大都市圏への展開

さらに2016年3月には、マンチェスター大都市圏エイジング・ハブ (Greater Manchester Ageing Hub, GMエイジング・ハブ) が立ち上げられた。これは、AFMの取り組みを人口275万人のマンチェスター大都市圏 (GM) に拡大しようというもので、マンチェスター市を含む10の市町村のほか、住宅やまちづくり、経済や産業文化に関するさまざまな団体が参加している。

今年2月には、このGMエイジング・ハブの主催で、国内外から専門家を集めた大規模な国際会議も開催された。

エイジフレンドリー・マンチェスター (AFM) の取り組み

● 組織体制と予算

AFMの施策や事業は多岐にわたつていくが、マンチェスター市がそれらすべてを推進しているわけではない。市の担当はAFMチームと呼ばれ、人員はわずか4名、しかも前述のマガリーさんを除く3名のプロジェクト・マネージャーは全員が他の業



務との兼務である。

AFMチームは市のほとんどの部局と連携し、外部のさまざまなパートナーと共同で事業に取り組んでいる。マンチェスター大学、マンチェスター大都市圏交通局、健康・福祉サービス団体、住宅公社、GMボランティア団体センター(およびそこに加盟するボランティア団体)、マンチェスター市内の文化施設などである。

特にマンチェスター大学では、建築学部や高齢化共同研究所(MICRA: Manchester Institute for Collaborative Research on Ageing)、マンチェスター博物館、ウィットワース美術館など、複数の組織がAFMに



AFMチームの3名のプロジェクト・マネージャー(左からアネットさん、ハンフリンさん、キーリーさん) Photo: M.Yoshimoto

深く関わっている。

市内各地域とのネットワークも2005年に整備された。北部、中心部、南部の3区域、さらに12の地域に分け、区域ごとの責任者と地域ごとの担当者(計15名)が置かれている。それぞれの地域のアクションプランの作成や各種イベントの運営などは、彼らを中心に地元の協力を得て進められる。現在この地域ネットワークは「バズ健康・福祉サービス」という組織*2によって運営されている。

AFMの方向性や戦略、具体的な事業を検討するために設置されたのが、エイジフレンドリー・シニア・ストラテジー・グループと呼ばれる各分野の関係団体や専門家の集まりだ。現在はGMエイジング・ハブ運営グループ(約20名)に衣替えしており、コアメンバーと分野別リーダーによって構成されている。

前者には、マンチェスター市を含むいくつかの自治体、福祉や医療関係の団体、高齢化共同研究所、経済・産業系のシンクタンクなどのメンバーが含まれており、高齢者フォーラムからも2名の高齢者が参加する予定になっている。後者には、経済と労働、健康的な高齢化とライフスタイル、交通と住宅、地域計画、技術・デザイン・イノベーション、文化・レジャーという6分野の専門家が参加している。

さらに、ベアリング財団やビッグ宝くじ基金のような助成団体、英国全体の取り組みである「孤独を終わらせるキャンペーン」

(*3)や「より良く歳を取るセンター」*4

など、連携する活動や組織も少なくない。マガリーさんはこうしたAFMの組織体制をタマネギの輪切りのような構造だと解説する。中心に4人のAFMチームがいて、その周りに何層もの関係団体が集まっているというのだ。その数は100団体を超える。

そして具体的な事業は、ハウジング・チームや地域サービス・チーム、デザイン・グループといった業務グループによって進められる。短期で終わるものもあれば、長期に及ぶものもあり、柔軟に対応するため組織体制は常に変化してきた。以前は組織図のようなものを作成したこともあったが、今ではそれに相当するものがないほど、複雑になっている。

市が支出するAFMの中核予算も今年度はたった4万ポンド(約600万円)だ。以前は10万ポンドの時もあったが、11年以降、市の予算は全体で40%、AFMの予算は60%削減された。そのためAFMの事業は外部資金の積極的な獲得によって成り立っている。最近では、GMエイジング・ハブの5年間の事業にビッグ宝くじ基金から1000万ポンド(約15億円)の資金を獲得した。

さらに、住宅事業は住宅セクターが、文化事業は文化セクターが、それぞれの自己資金によって、AFMの事業に取り組んでいる。マンチェスター大学の建築学部や高齢化共同研究所、博物館や美術館も同様だ。

4人のAFMチームの役割は、ビジョン

や政策、戦略を作成し、AFMの事業を推進するために人々や組織を結びつけてその気にさせることである。4万ポンドはそのための予算というわけだ。AFMチームのひとり、パトリック・ハンフリンさんは「人々を仲間に引き込み、やる気にさせ、AFMに対する情熱や信念をもたせる。我々には、そのための資金と時間、リソースがある。それだけのことです」と言う。予算は大きいに越したことはないが、この少ない予算で10年以降AFMの活動を継続できていること自体が本当の成果だ、と力説するのは責任者のマガリーさんだ。

●高齢者理事会 Older People's Board

AFMの注目すべき点のひとつは、高齢者自身がサービスの受け手としてではなく、推進役、担い手として深く関わっていることである。その中心的な存在が、高齢者理事会だ。これは2004年に当時の政策に基づいて、VOP理事会(Valuing Older People Board)として設置されたも



高齢者理事会会長のElaine Unegbuさんはカルチャー・チャンピオンの初期からのメンバーでもある。 Photo: M.Yoshimoto

*2 Buzz Health & Wellbeing Service.マンチェスター・メンタルヘルス社会介護NHSトラスト(Manchester Mental Health and Social Care NHS Trust)を母体に2016年4月に設置。

*3 "Campaign to End Loneliness" <http://www.campaigntoendloneliness.org/>

*4 "Centre for Ageing Better" <https://www.ageing-better.org.uk/>

ので、メンバーは前述の高齢者フォーラムから選ばれる。

現在は、地域バランスや活動内容、経験などを踏まえ、17名(内2名は市議会議員)で構成されている。6週間に1回の開催で、取材中に開かれた理事会にオブザーバーとして出席させていただいた。

その日の最初の議事は、市が検討中のボランティア・地域助成制度で、担当部局の職員が要項案を説明し、それに対して理事会メンバーが意見を述べるというものだった。その他の議題は、世代間交流事業、日帰り遊覧事業、文化事業などの活動報告と意見交換、AFMとGMエイジング・ハブに関する近況報告などであった。

2時間の理事会にはAFMチームも全員出席していたが、複数の理事から財政的にも組織的にも厳しい状況の中、市がAFMの活動を継続していることに感謝の言葉が述べられ、また、AFMチームのメンバーは、理事の献身的な取り組みに対して敬意と感謝をもって接していたのが印象的だった。

● 高齢者憲章 Older People's Charter

AFMを象徴する取り組みのひとつが、2015年に制定された高齢者憲章である。これは、前述の高齢者理事会の提案で実現したもので、何カ月もかけて、内容と文章が練り上げられた。歳を取っても何の障がいもなく健康で充実した生活を送るために必要な事項として、「図表2」の6項目

が定められている。

AFMチームのひとり、ティム・キリーさんによれば、高齢者憲章はWHOのAFCのテーマやメソッドに基づいているが、マンチェスター市のために凝縮・加工されたもので、エイジフレンドリー・マンチェスターがどんなものか、すべてを要約したものになっているという。

憲章に沿ったまちづくりを進めるため、市内の団体や市民にこの憲章への誓約を奨励しており、具体的にできることとして次のような取り組みが例示されている。

- ・ 高齢者優先の椅子や休憩できる場所の設置
 - ・ トイレの増設や高齢者への優先提供
 - ・ 高齢者でも開閉が容易なドアの整備
 - ・ 店内の案内、重い荷物の運搬や無人レジの利用に対する手助けや介助
 - ・ 順番待ちの際の高齢者の優先
 - ・ オンラインサービス利用の研修
 - ・ 高齢者向けのセール、キャンペーン
 - ・ 高齢者の雇用促進
 - ・ 高齢者宅への定期的な立ち寄り
 - ・ そして、ホームページには、ハレ・コンサート協会、サウスウエイ住宅公社、マンチェスター図書館、ロイヤル・エクステンジ劇場、マンチェスター大都市圏消防局といった組織をはじめ、レストランやカフェなどが、具体的にどのような対応をしたかが紹介されている。
- 高齢者憲章はAFMの理念や目標を謳うと同時に、市民や各種団体、企業、店舗な

図表2 マンチェスター市の高齢者憲章

AGE-FRIENDLY MANCHESTER, 2015



高齢者憲章 | OLDER PEOPLE'S CHARTER

この憲章は、マンチェスターのすべての高齢者が、高齢者に優しい都市で暮らすため、従来の権利を強化するものである。
マンチェスターには多様な人々が暮らしており、この憲章は高齢者の多様性を受け入れる。それは、性、民族、性的指向、宗教、障がいを含む。

この憲章は、市内およびあらゆる場所における高齢者の多様な役割のすべてを評価する。

この憲章は、社会においてしばしば過小評価されているすべての高齢者のためのものであり、市内のすべての主要な団体に適用を奨励する。それは行動を通じて確実なものになっていく。

価値 Value	自立 Independence	情報 Information
<p>高齢者は尊厳と敬意をもって扱われ、意味があり、目標のある人生を送る権利を有している。彼らの貢献は、市にとって経済的にも社会的にも重要な財産である。高齢者は、市をより良い場所にするため、すべての世代の人たちと一緒に市内で働く。</p> <p style="text-align: center;">健康・生きがい Health and Wellbeing</p> <p>高齢者は、住む場所に関係なく、社会的かつ創造的な機会にアクセスでき、健康的で将来を見通せる生活を営む権利がある。彼らは医療・福祉サービスにアクセスし、残りの人生すべてを自ら決定する権利を有している。</p>	<p>高齢者には、どこで、どのように、誰と暮らすか自ら決定する権利がある。彼らは妨害や障がいなくサービスを受け、市内各地に移動する権利を有している。</p> <p style="text-align: center;">決定権・発言力 Decision-Making and Voice</p> <p>高齢者は、自身の生活に影響のある決定のプロセスを選択し、コントロールし、意味のあるものにする権利がある。彼らは、自身を支えるために提供されるサービスのデザインや実施への関与を含め、人生のあらゆる側面を形成する権利を有している。</p>	<p>高齢者は、関連する情報や助言、案内をさまざまな形式で、最新かつ適切で現実の問題に直結する状態で受け取る権利がある。</p> <p style="text-align: center;">安全・安心・公正 Safety, Security and Justice</p> <p>高齢者は、不安に陥ったとき、真剣に受け止められる権利がある。彼らが自己を保護するために法的な対応を必要とするとき、高齢であることを理由に異なる扱いを受けることがあってはならない。</p>

出典:「Age-friendly Manchester, 2015, Older People's Charter」に基づいて作成

図表3 AFMのワークプラン(2016/17)の概要

テーマ	目標
エイジフレンドリーな地域づくり	<ul style="list-style-type: none"> 高齢者が地域の事業や活動を実施したり、参加したりすることを支援 健康・福祉を推進する地域の社会活動、文化活動、娯楽などの機会を促進 社会的な孤立や孤独の軽減
エイジフレンドリーなサービスの提供	<ul style="list-style-type: none"> AFMの高齢者憲章の認知度と活用を増大 高齢者の経済的、文化的参加を増大 高齢者の健康・福祉の増進
交流と参加の促進	<ul style="list-style-type: none"> 高齢者のAFMへの参加機会の強化 エイジフレンドリーな形式で発行されるコミュニケーション数の増大 AFMのプロモーション
知識と改革	<ul style="list-style-type: none"> 市の高齢者のニーズや資産の評価の完了 AFMの進展を評価する新たな指標の合意 高齢者の生活を改善するための調査研究の実施
影響(波及)	<ul style="list-style-type: none"> 地域レベル、国レベル、国際レベルの戦略と財政支援プログラムにおけるエイジフレンドリーな働きかけに対する認識の増大 地域レベル、国レベル、国際レベルでのマンチェスターの協働パートナーの強化 AFMの財源の安定化

出典：Manchester City Council HP

どが自らAFMに取り組みきっかけとして
も機能している。

●事業計画 Work Plan 2016/17

ここまで述べてきたことからわかるように、AFMの事業や活動の全体像を把握するのは簡単ではないが、2016年度の事業計画を「図表3」に整理した。

その冒頭には「AFMは、高齢者の生活

の質を高め、市を、歳を取るのにより良い場所にすることを目指しています。私たちは高齢者の方々ならびに公的団体、民間団体、ボランティア団体、地域団体などのパートナーと一緒に、それを達成するために働きます」と記載されている。

計画では「図表3」とおり5つのテーマが設定され、それぞれに複数のアクションプランと実施地域、推進役が示されている。

●ヒースフィールド・ホールにおける地域プログラム

AFMのホームページには、高齢者が参加できるさまざまな催しが紹介されている。地域の各種イベント、文化活動、スポーツや運動、定期的な宴会、LGBTの集まりなどである。催しの紹介コーナーには、ネット上から誰もがイベントを登録できる。

高齢者向けの地域イベントの成功例として、AFMチームのひとりトレイシー・アネットさんが紹介してくれたのが、市内では高齢化の進むニュートン・ヒース地区の事例である。VOPの始まった2003年頃から、地域の高齢者たちが自らさまざまな活動を立ち上げるようになり、12のボランティア団体が、毎日教室やイベントを開催するようになった。今では会場のヒースフィールド・ホールが、地域の高齢者になくてはならない場所になっている。

ライオンダンスやヨガ、フィットネスや体操などの教室に加え、認知症患者が参加

できるカフェ、地域の歴史講座、セラピーなどで、1回50ペンスから2ポンド(75〜300円)で参加できる。運営費は、参加費と各ボランティア団体の資金調達で賄われている。

例えばフロント・ロー・フィルム・クラブは、映画館が遠くて好きな映画が見られなという地域の高齢者の声に応じて、毎週上映会を開いている。そのため、助成金を獲得して新しいプロジェクターを購入することに成功した。

それらの活動は、AFMチームが支援しているものの、ほとんどは自然発生的に始まった。最近発行された「ヒースフィールド・ホール」という冊子には、プログラムの紹介とスケジュールに加え、次のような高齢者の声が掲載されている。「もしこのホールがなかったら、たぶん私たちは家の中で座ったまま、自分たちを少し可哀想な存在だと思っていたわ」

●オールド・モートにおけるまちづくり

まちづくりや住宅の例もひとつ紹介しておこう。2007年にマンチェスター市はすべての公営住宅を民間に売却した。以降、市南部の6000戸の住宅を管理しているのがサウスウェイ住宅公社だ。入居者の高齢化が進み、60歳以上の入居者が暮らす住戸が43%になったことから、マン

チェスター市とマンチェスター大学の協力を得て、特に低所得者層の多いオールド・モート区を対象に、エイジフレンドリーの

視点から大がかりな調査を行った。地区内の高齢者も調査に協力し、後に彼らは高齢者チャンピオンと呼ばれて、エイジフレンドリーなまちづくりの推進役になった。

どこにどんな課題があるか、調査の結果を地図に詳細に書き込んだ報告書がまとめられた。それらの課題を改善するため、屋外スペースと建物、交通機関、住居、尊厳と社会的包摂、市民参加、コミュニケーションと情報という6つの分野に分けて、100を超えるアクションプランが作成された^{*5)}。

それに基づき、高齢者チャンピオンたちが市と掛け合せて、交通量の多い横断歩道の青信号の時間延長や、廃止予定のバス路線の継続を獲得した。

ユニークなのは「Take a Seat」キャンペーンと呼ばれるものだ。長い距離を歩けない高齢者のために、店舗が道路沿いに椅子を用意して「Take a Seat」というステッカーを貼って、自由に着座してもらおうというものだ。またガラス窓に「We are Age Friendly」というステッカーを貼ったお店は、何も買わなくても高齢者を受け入れ、店員がおしゃべり相手になったり、トイレを貸してくれたり、飲み物を出してくれたりする。

こうした身近なものだけではなく、地域内での高齢者の転居を促す取り組みも行っている。調査の結果、子どもたちの独立後

*5 WHOのエイジフレンドリー・シティの8つのテーマ領域から地域の実情に合わせて6つが選ばれている。

例が多いことが判明したためだ。しかし高齢者にとつて引越は容易ではなく、ましてや住み慣れた地域から出て行きたくない。そこでサウスウェイ住宅公社が小さな住宅を用意して、高齢者の転居をサポートする、というのである。

この取り組みは10年頃に始まったもので、その成果を受け継ぎ、現在ではGMエイジング・ハブの「高齢化への熱い思い(Ambition for Ageing)」という名前の大型プロジェクトとして継続されている。ビッグ宝くじから10万ポンドの資金を獲得したのはこの事業で、オールド・モートの成果が評価された結果である。

AFMの文化事業



AFMの大きな特徴のひとつは、文化が中心的な活動のひとつに位置づけられていることだ。

●カルチャー・チャンピオンとヴィンテージFM

文化の分野でも高齢者自身がその推進役となっている。高齢者の文化活動への参加を奨励する「カルチャー・チャンピオン」というグループだ。50歳以上なら誰でも参加可能で、2011年10月に創設され、1年後には80人が参加、現在では約150人になっている。

彼らの役割は、近隣の高齢者に対して、芸術イベントや文化活動を知らせ、参加を

促すこと、高齢者の文化芸術へのアクセスをサポートし、奨励すること、文化団体と一緒に高齢者向けの活動をデザインすること、などである。

チャンピオンのひとり、コレット・クロステールさんは退職して何かやりたいと思いい、ウィットワース美術館の「ハンド・メイド」講座に参加した。それをきっかけに「扉がどんどん開いて、新しいことにチャレンジするようになった。カルチャー・チャンピオンになって、生活にリズムが生まれ、今ではライフラインとして機能している」と言う。

ある時、今まで美術館に一度も来たことのないタクシー運転手を美術館に誘ったところ、翌日家族を連れてきたそう。そんな時、彼女は「これはみんなあなた方なのなんですよ」と紹介する。今では、郊外の人たちに美術館に来てもらう活動を計画するようにもなっている。

キヤス・ウオールさんもハンド・メイドの参加者だ。大勢の人たちが美術館や博物館の前を通過して「この美術館、素晴らしいね」と言っても、実際に入ったことのある人は限られている。そういう状況を変えたくて、美術館の素晴らしさを大勢の人に伝えていく。文化は高齢者を外に連れ出し、新しい人々と出会う機会を生み出す、というのが彼女の考えだ。

カルチャー・チャンピオンが最近始めたユニークな活動が、ヴィンテージFMである。コミュニティFMの協力で実現したも

ので、カルチャー・チャンピオンのメンバーがアナウンサーやプロデューサーになる訓練を受け、高齢者自身が取材して放送するというものである。

芝居を見てレビューを流したり、高齢者記念日に美術館からライブ放送をしたり、芸術団体やアーティストに取材をしたりして、高齢者が高齢者自身の言葉で文化の現場を伝える番組になっている。ひとりで家にももりつきりになっている高齢者は少ない。どうすれば彼らにメッセージを届けることができるか、という発想から生まれたアイデアだ。

マンチェスター博物館、ウィットワース美術館のラーニング&エンゲージメント部門長で、GMエイジング・ハブ運営チームの文化の責任者を務めるエスメ・ワードさんは、「カルチャー・チャンピオンは、誰もが文化が起すことのできる変化について雄弁に、力強く語れる」という。そして、次のような興味深いエピソードを話してくれた。

ある時、AFMに参加する文化施設や芸術団体がカルチャー・チャンピオンたちに、それぞれどんな高齢者向けのプログラムが可能かプレゼンテーションをして、意見を聞く会が開かれた。長いプレゼンを辛抱強く聞いていたチャンピオンのひとり、レイさんが、とうとう辛抱できなくなつて次のように発言した。「私はここに座つて、あなた方が私たちにできることをずっと聞かされてきました。でもいつになつたら、あ

なた方は私ができることを尋ねてくれるのですか」

このひとりでAFMの文化事業は大きく方向転換することとなった。それまで使っていた文化の提供(Culture Offer)、すなわち、文化施設や芸術団体が高齢者のために何かを提供するというのではなく、高齢者と一緒になつて文化活動を推進していくことが大切だということを気づかせてくれた、とワードさんは言う。カルチャー・チャンピオンはAFMの文化事業に対する批評家としても機能しているのである。

GMエイジング・ハブでは、カルチャー・チャンピオンのスキームを、マンチェスター以外の地域にも拡大する計画だ。

高齢者向けの文化事業VOPカルチャー・オフアーに向けて、市のVOPチームとマンチェスター市立美術館、ロイヤル・エクスチェンジ劇場、ライブラリー劇場(現在は閉館)らが意見交換を始めたのは05年頃だった。

彼らはすでに高齢者向けの事業を行つていて、市との連携策を検討していたところ、ほかにも関心をもつ文化施設があることが判明。グループの輪が広がつて、AFMカルチャー・ワーキング・グループが設置された。今では34の文化施設などが参加しており、年に4回、定期的な会合を開いている。そのほかにも小さなグループで特定のテーマで会合を開いたり、互いに成果や課題を共有したりして、文化面からAFMの活動を推進している。



AFMカルチャー・ワーキング・グループのメンバー。左からエドソンさん(マンチェスター市立美術館)、パリーさん(ロイヤル・エクスチェンジ劇場)、ヒスコックさん(マンチェスター国際芸術祭)、コンウェルさん(AFMカルチャー・コーディネーター) Photo: M.Yoshimoto

30以上の団体が参加して、高齢社会との向き合い方について集中的に意見交換することで、新たな可能性が生まれる。時にはアーティストを招いてワークショップ形式の会合を行うこともある。福祉や住宅、まちづくりなど他の政策分野の団体との連携も容易になるはずだ。

実際、健康・福祉局や住宅公社からゲストを招いたりもする。それが介護職員の文化施設への訪問、エレベーターや椅子、カフェなどの環境の確認に繋がった。福祉施設の関係者は、安心して高齢者を文化施設に連れて行くことができると思うようになり、逆に文化施設の側は、誰でも受け入れられると自信をもてるようになった。

その中できわめて重要な役割を果たしているのが、AFMカルチャー・コーディネーターのクレア・コンウェルさんである。彼女はミーティングの設定、関係者との仲介や調整のほか、高齢者理事会でも文化セクターを代表して出席する。彼女はウィットワース美術館の高齢者プログラムの担当でもあり、人件費は市と美術館が6対4で負担している。

文化施設で行われるAFMの代表的な事業は「図表4」に整理したとおりである。その前提としてふれておかなければならないのは、彼らが高齢者政策に関する基礎的な研修を受け、必要な知識を有している、ということだ。例えばウィットワース美術館は、認知症フレンズ^(*)として訓練を受けており、エイジフレンドリー・ミュージアム・ネットワーク^(*)のメンバーとして創造性の時代^(*)の活動に参加している。

● コーヒー、ケーキ、文化
Coffee, Cake and Culture

ともにマンチェスター大学の一部門として運営されているマンチェスター博物館とウィットワース美術館は、2008年からマンチェスターの病院や医療専門家と共同でさまざまな活動に取り組んでいる。例えば毎週1回、アーティストが美術館の小さなコレクションを詰め込んだ箱を持って病院の認知症患者を訪問する活動などを行っ

図表4 エイジフレンドリー・マンチェスターに参加する主な文化施設の高齢者向けプログラム

文化施設名	プログラム名	概要
マンチェスター市立美術館 Manchester Art Gallery	哲学カフェ Philosophy café	・Age-UKと共同でスタートし、週2回、自信や罪、愛など人生の大きな疑問についてカフェ形式で話し合いを行う。展覧会やコレクションとも関連づけて実施し、高齢者にも気軽に参加してもらうことで、社会的な孤立や孤独を減らす狙いがある。 ・2名の高齢者(うち1名はカルチャー・チャンピオン)が、美術館スタッフと一緒に企画、運営、ファシリテートを担当。
マンチェスター博物館 Manchester Museum	美術館がやってくる Museum Comes to You	・認知症支援組織などとの協働で、博物館のコレクションを介護施設やコミュニティ施設に持ち出し、美術館のスタッフがコレクションの解説やその裏に隠されたストーリー、歴史などを解説するプログラム。
	コーヒー、ケーキ、文化 Coffee, Cake and Culture	・ウィットワース美術館と共同で、毎月1回、介護施設などの認知症患者とその家族や介護者の訪問をフルサポートするプログラム。特別な訓練を受けた学芸員による解説や作品に触れる機会が提供される。 ・最後にコーヒーとケーキが用意され、参加者に会話の機会が提供される。認知症とともによりよく生きられるようにすることが目標。
	文化注射 +Culture Shots	・ウィットワース美術館と共同で、マンチェスター市内の8カ所の病院で行う1週間の無料プログラム。入院患者だけではなく、病院を訪れる人々や医師、看護婦などのスタッフのために、美術館や博物館のコレクションの一部を病院のアトリウムなどに展示。 ・病院でのアーティスト・イン・レジデンスやワークショップ、オペラ歌手のミニコンサートやダンスパフォーマンスも開催される。
ウィットワース美術館 The Whitworth	ハンドメイド Handmade	・木版画や彫刻、水彩などさまざまな技術をアーティストが教える教室。ほぼ毎週開催。創作のモチーフとして美術館のコレクションも活用される。
	高齢男性の文化活動参加の ハンドブック A Handbook for Cultural Engagement with Older Men	・英国内6カ所のケーススタディを行い、文化活動との関係が最も少ない高齢男性が文化に参加するために必要な要素をまとめたガイドブック。 ・ハンドブックの冒頭には、詩人のトニー・カリールさんが、高齢男性と会話を重ねてつくった詩「人生、愛、死そして芸術の男意気(Life, Love, Death and Art Machismo)」が掲載されている。
ロイヤル・エクスチェンジ劇場 Royal Exchange Theatre	高齢者劇団 Elders Company	・60歳以上の高齢者による劇団。現在は定員一杯のため、高齢者向けの演劇づくりに関するワークショップ「エルダーズ・マンズリー」を開催。
	高齢者研究 Elders Investigate	・高齢化と文化、とりわけ演劇に関するオープン・スペースなディスカッションとディベートを行う。小説家サラ・パトラーのリードで実施。
マンチェスター・カメラータ Manchester Camerata	ミュージック・イン・マインド Music in Mind	・2012年に開始した認知症とその介護者を対象にしたプロジェクト。音楽療法士とマンチェスター・カメラータの演奏家と共に、即興的な曲づくりに取り組む。1回のセッションは30分前後で、参加者は3~10人程度。 ・演奏家は全員、アルツハイマー協会等の認知症に関するトレーニングを受けており、セッション終了後には振り返りの意見交換が行われる。
	テムサイド・オペラ Tameside Opera	・マンチェスター東部のテムサイドで、同地区の高齢者の孤立を削減することを目的に行われた高齢者のオペラ創作プログラム。 ・マンチェスター・カメラータの作曲家、脚本家、音楽家と一緒に6回のワークショップを行い、テーマを見つけて新しいオペラを創作。ブリッジウォーターホールとポートランド・ベイジン博物館で披露された。

出典：各団体からの提供資料やHP掲載情報に基づいて作成／注：マンチェスター博物館、ウィットワース美術館とも、マンチェスター大学の一部門として運営されている。

*6 認知症協会(Alzheimer's Society)の取り組みで、認知症に関する人々の見方を変えることが目的。認知症に関する基礎的な知識を身につけるため、一時間の講座もしくはビデオ研修を受けた後、具体的なアクションプランを作成、実施して協会に報告する仕組みになっている。

*7 エイジフレンドリー・ミュージアム・ネットワークは大英博物館が複数の博物館と共同で実施する取り組みで、どのようにすれば博物館がもっと効果的に高齢者と一緒に高齢者のための活動ができるかを追求している共同プロジェクト。

*8 創造性の時代(Age of Creativity)は、創造性と芸術が高齢者のより良い健康や福祉、生活の質の獲得を支援することを信じている専門家のネットワーク。



左：マンチェスター博物館で行われた「コーヒー、ケーキ、文化」の様子。コレクションのウサギの剥製が使われている
写真提供：マンチェスター博物館／右：マンチェスター・カメラータの「ミュージック・イン・マインド」の様子 写真提供：
マンチェスター・カメラータ

てきた。「図表4」に掲載した「文化注射」も病院との親密なパートナーシップから生まれたものだ。

「コーヒー、ケーキ、文化」という事業は、毎月1回、介護施設などの認知症患者とその家族や介護者の博物館、美術館への訪問をフルサポートするプログラムである。エ

ントランスでの歓迎、展覧会やギャラリーでの解説付きツアー、コーヒーやケーキが用意された対話の場、という3つのパートによって構成されている。ツアーでは、特別な訓練を受けた学芸員が、参加者に作品との対話を促していく。

この事業では、博物館や美術館の空間と作品が最大限に活用されるが、回想法や記憶を回復することよりも、想像や創造、学習が重視される。参加者は自分の過去や美術館での体験について話し合ったり、新しいことを学んだり、自宅に持ち帰れる作品をつくったりする。

認知症患者だけではなく、家族や介護者が芸術作品にふれ、創作活動を行うことで、認知症を取り巻く社会的な環境自体を改善し、認知症とともにより良く生きることを大きな目標としている。最近では認知症患者だけではなく、美術館や博物館の訪問に特別な手助けが必要な人たちも対象に含めるようになった。

●ミュージック・イン・マインド Music in Mind

室内楽団のマンチェスター・カメラータが2012年に始めた認知症とその介護者を対象にした事業で、音楽療法士と演奏家が介護施設などを訪問し、一緒に曲づくりや歌、演奏などを行う。16年には350人が参加、18年までに3000人の参加を目指している^{(*)9}。

単に音楽を楽しむのではなく、より創造

的な活動を行うのが特徴で、公開の場で演奏を行うこともある。ラーニング部門の責任者ルーシー・ゲデスさんは「私たちのワークショップはすべて作曲を中心に行っています。認知症で言葉を失っていても、机を叩いたりして、曲づくりに参加できる能力が残されています」と言う。

実際、これまでの取り組みでは、重度の認知症で言葉を失っていた入所者が、最初のセッションで大声で「スイング・ロウ」などの曲を全曲歌ったり、無口になっていた人が今までそんなことがなかったかのように施設のスタッフと流暢に会話をしたり、といった成果が報告されている。

マンチェスター・カメラータではこうした活動が、認知症やそれを取り巻く環境にどのようなインパクトがあるか、評価プロジェクトにも取り組んでいる。14年に実施した評価調査では、次のような成果が報告されている^{(*)10}。

- ・落ち着きを取り戻し、幸せに感じたり、会話したりするようになる
- ・長期的には音楽の価値を認識したり、他の活動と結びつけたりできる
- ・記憶や自信などの向上、介護者との関係の改善などが見られる

ただし、人によって成果はまちまちで、認知症の種類や症状の重さによって成果は異なる

このプログラムは、認知症の人々とその介護者の生活を向上させたり、音楽活動によってケアの質を高めたり、薬の量を

減らしたりすることを目標にしている。マンチェスター大学のジョン・ケディ教授は、「正しい音楽活動を行えば、認知症ケアのコストを削減できるのではないか」とコメントを寄せている^{(*)11}。

●ゴートン・ヴィジュアル・アーツ

もうひとつ、マンチェスター東部のゴートン地区、公園内にある小さなコミュニティ施設を拠点にユニークな活動を行う高齢者のグループを紹介したい。

アーティストのイアン・マッケイさんの監修で、15人前後の高齢者(最高齢は95歳)が、実に多様な創作活動に取り組んでいる。例えば近年急速に減少しつつあるパブを象徴する作品として、ビール用コースターやロゴの入ったタオルなどをニットや刺繍で制作したり、第二次世界大戦時代に地域にあった軍需工場をモチーフにしたバナナをつくったりして、学校やコミュニティセンターに展示している。

最近では、参加者が各々の思い出を描いて罫をつくり、95歳のおばあちゃんも含め、皆で海岸での凧揚げを楽しんだ。

バナナや罫に描かれているのは、爆弾工場場で働く女性たち(男性は全員戦場にかり出されたため)や、工業地帯として栄えた頃の動物園や遊園地などで、地域の歴史や誇りを世代を超えて語り継いでいきたい、という思いが込められている。

メンバーが、コミュニティセンターなどに出掛け、地域のお年寄りたちと一緒に創

*9 マンチェスター・カメラータは昨年12月に、(公財)日本センチュリー交響楽団とプリティッシュ・カウンシルの招聘で来日し、大阪のオリーブの園でのワークショップと公開フォーラムを行った。

*10 New Economy "Evaluation of Music in Mind", May 2014

*11 The Guardian "Could music projects cut the cost of dementia care?", Wed 2nd Mar 2016



ゴートン・ヴィジュアル・アーツのメンバー。胸には「OV GORTON (ゴートンに誇りを)」の文字 Photo: M.Yoshimoto

高齢社会における文化の役割



作活動を行うアウトリーチにも取り組むほか、2014年には9カ月かけて35メートルのモザイク作品を製作し、小学校やマーケットに寄付、設置した。

現在85歳のマリー・クーデラスさんは、子どもの頃からずっと画を描きたかったものの家庭環境から叶わず、70歳を過ぎてようやくそれができるようになったという。しかし彼らの活動は、趣味的なものにとどまらず、地域の誇りや世代間交流を生み出す社会的なインパクトを有している。

文化や芸術活動は、高齢社会にとってど

んな意味があるのか。前出のワードさんは次の3つのポイントを挙げる。

- ・参加と社会への接続
- ・高齢になってからの才能や創造力、活動力の受け皿
- ・高齢化に対する別の見方やストーリーづくり

まず、高齢者が文化活動に参加することは、社会との繋がりや他の世代との関係づくりにかわめて有効である。最近の研究では、より良く歳を取るためには、社会と繋がりをもつことがどんな投薬よりも効果がある、ということが報告されているそうだ。高齢者に文化や芸術への参画を促すことは、生き生きとした高齢社会に不可欠の要素であろう。

ふたつ目は、文化活動を通して作品づくりに取り組んだり、自分を表現したりすることで、高齢者がそれぞれの才能や創造力を発揮し、家に閉じこもることなく、活発な行動に結びつく、ということである。文化は、歳を取るにつれて失われる自主性を引き出し、高齢者に発言の機会を与える。カルチャー・チャンピオンからしばしば寄せられる意見に「自分たちが認識されていない」ということがあるそうだ。高齢者が自分たちの存在を社会に主張するためにも、文化は有効である。

そしてワードさんが最近注目しているのが、文化は、歳を取る、高齢になる、ということと別の物語として表現することが可能だ、ということだ。歳を取るといふこと

は皺が増えたり、記憶力が衰えたり、マイナスのイメージが大半を占めている。しかし、高齢になることに魅力を感じるようなストーリーを文化や芸術なら紡ぎ出せる可能性があるというのである。GMエイジング・ハブではそのことにチャレンジする計画だ。

紙面の関係で詳しくは紹介できないが、マンチェスター大学の高齢化共同研究所では、文化や芸術が高齢者や高齢社会にどんな効果やインパクトをもたらすかということに焦点を当てた研究に取り組んでおり、さまざまな成果を発表している。

AFMから学ぶこと



日本でも、アーティストが高齢者施設を訪問してワークショップを行ったり、高齢者自身が演劇や音楽活動に参加したりすることは活発になってきている。そのことで、リハビリでは上がらなかった腕が上がったとか、高齢者が新しい生きがいを見つけて生き生きした、といった成果や効果が各地から報告されている。

個々の取り組みには、マンチェスターの事例より魅力的なものもあるかもしれない。しかし、残念ながらそれらは点として存在しており、地域全体を巻き込んだ大きな動きになっていない。今回、AFMを取材して一番感じたのはそのことだ。マンチェスターでは、従来の高齢者政策を、WHOのAFCの枠組みを使って強化し、

大都市圏にまで拡大させている。

しかし、市自体がそのことに割く人員も予算も極めて小さい。それでも文化を含めた総合的な高齢者政策を展開できているのは「多様な団体や組織とパートナーシップを形成し、そのパートナーに権限を委ねる組織体制となつていくこと、集中型ではなく分散型のモデルとなつていくこと」だというのが、ワードさんのコメントだ。

もうひとつ注目したいのは、高齢者自身がサービスの受け手としてではなく、高齢者政策の担い手、推進役として深くコミットしている、という点である。AFMの戦略を検討する高齢者理事会、自分と同世代の高齢者を文化活動に巻き込んでいくカルチャー・チャンピオンは、マンチェスター市の高齢者政策にきわめて大きな役割を果たしている。

高齢者自身が、政策の検討や立案、事業や活動の担い手となるような仕組みや枠組みをどのように整えていくか。そこまできかなくても、高齢者の声を直接聞いて政策に活かすことはできないか。日本の現状からは容易なことではないと思われるが、これからの高齢者政策を考える上で検討する価値は十分にある。

いずれにせよ、マンチェスターでは、高齢者政策がひとつの大きな運動として都市政策全体に根を下ろしている。何よりもそのことが、政府や自治体、民間団体など、高齢社会と向き合う誰もが学ぶべき点であろう。